

木下利玄歌集

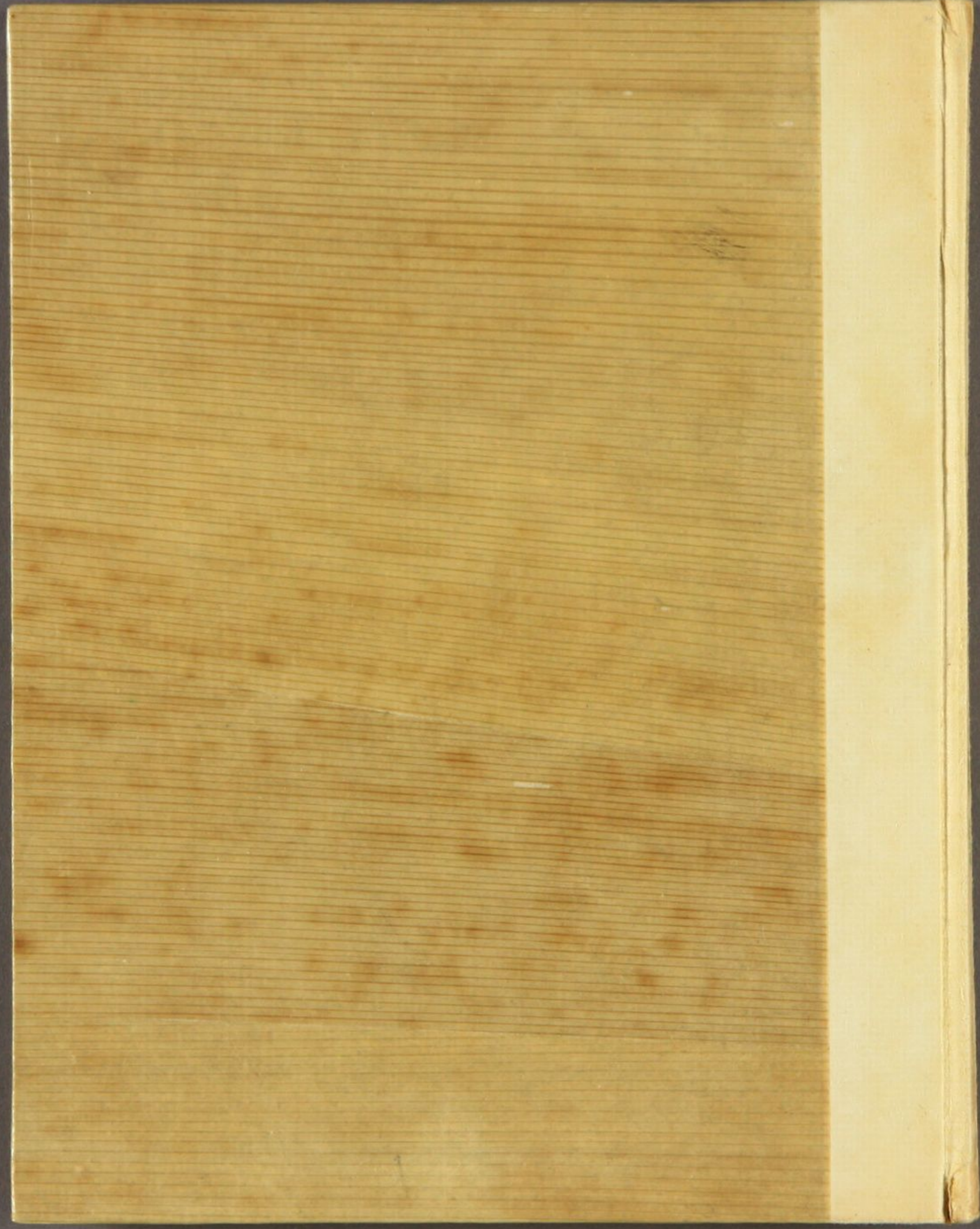
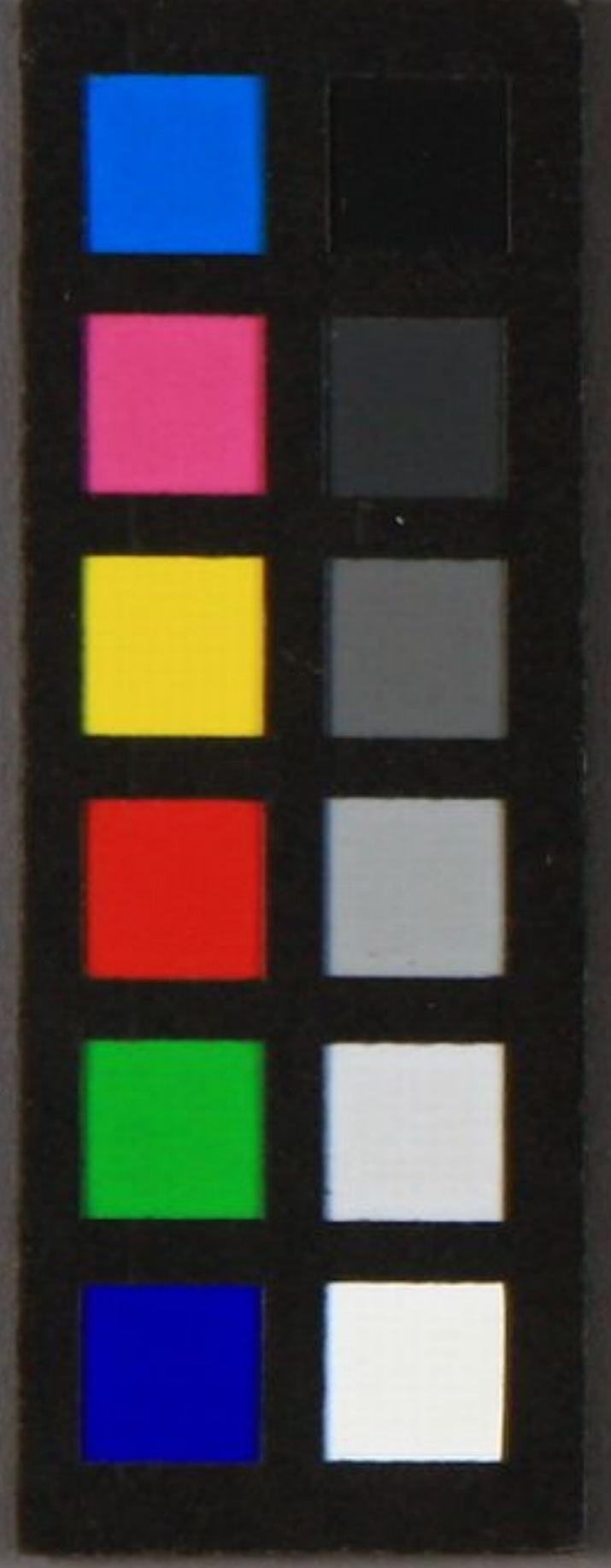
銀

東京
洛陽堂





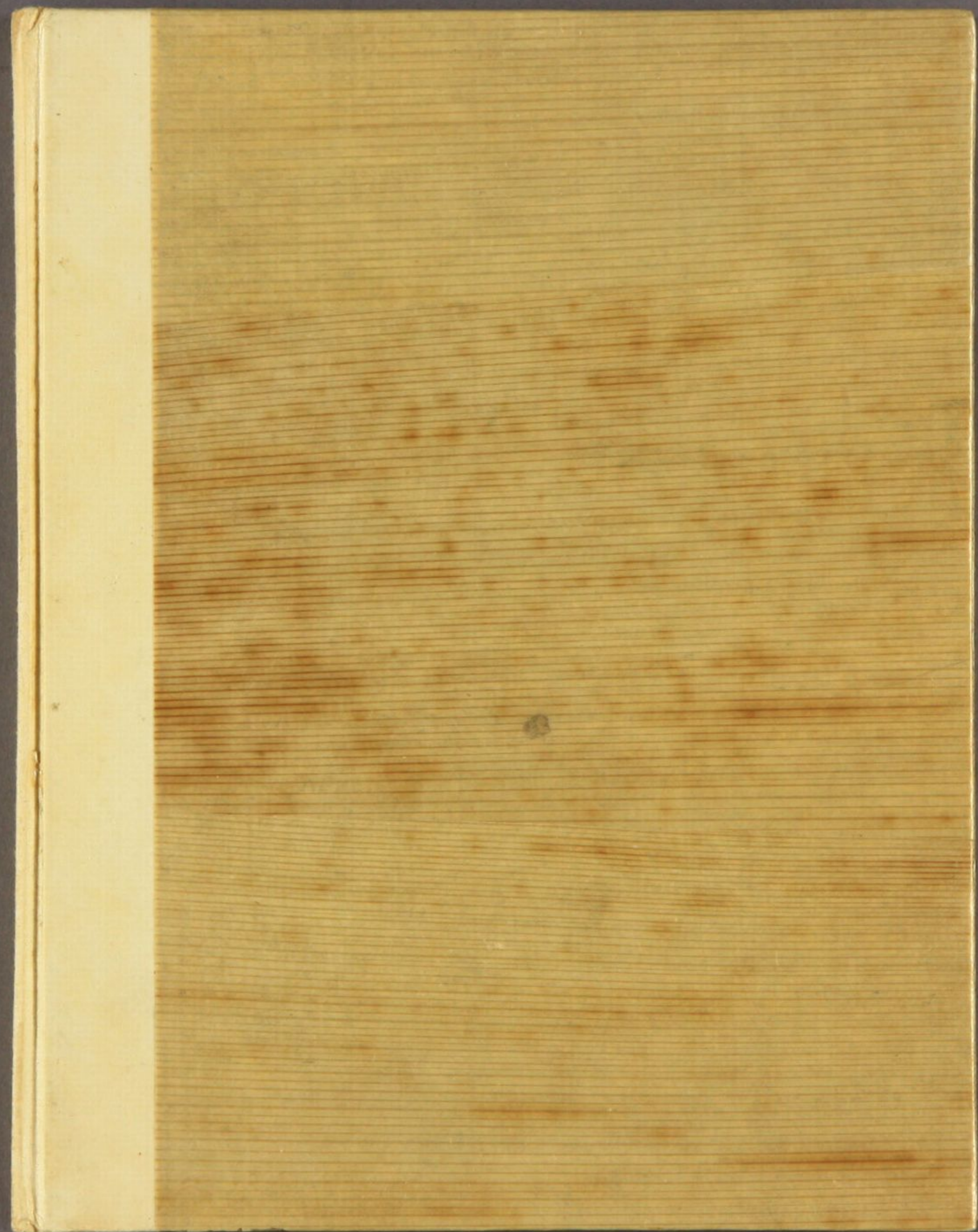


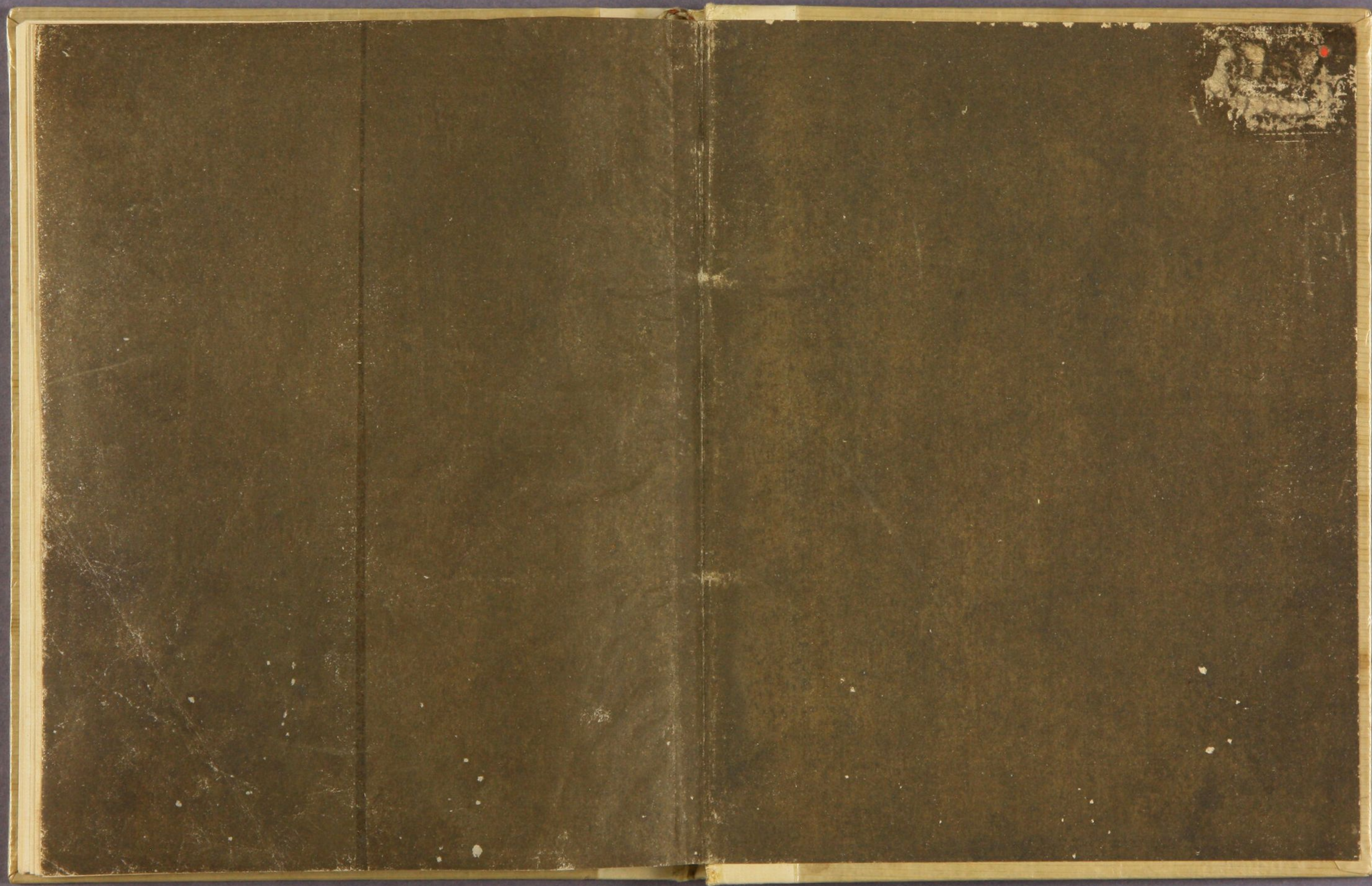


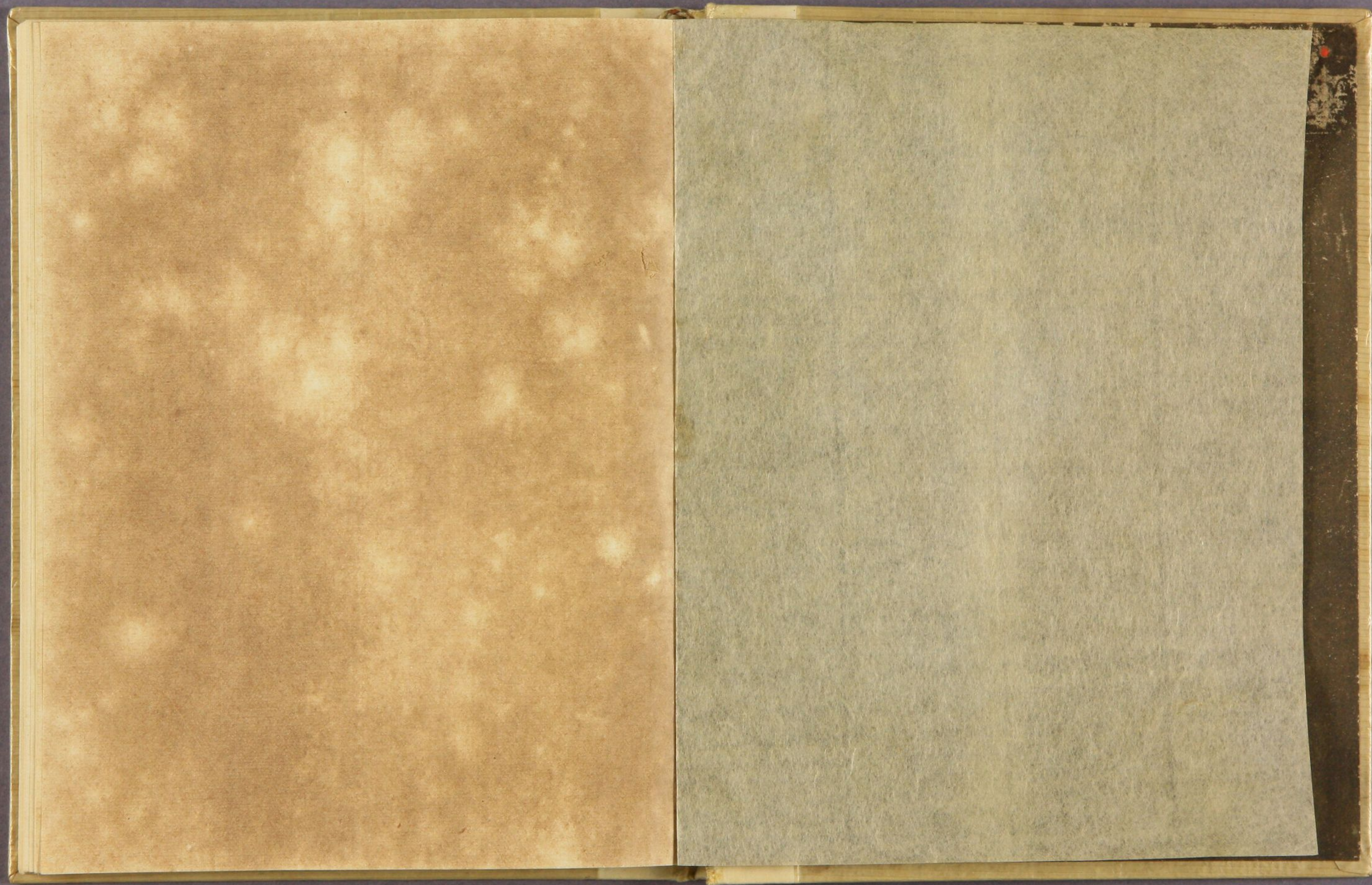
銀

・

木下利玄歌集







銀

木下利玄歌集

銀

大正三年五月十五日



我が亡き子利公に

利公の遺文

あ かり 二三四
か 二三四
八 つ 口 二六六

粉 雪 七六
落 葉 樹 八六
地 面 二三四
利 公 の 爲 め に 二四二
夏 一六六
指 の 傷 一八〇
夕 方 に 一九〇
蕊 二〇〇
紐 二二四

み
ち
の
く
に
て

みちのくの一の關より四里入りし畷に日暮れ
螢火をみる

賊住みし窟いはつに近きみちのくの水田の畔に燃ゆ
るほたる火

みちのくの石原道に日は暮れて搖るる俣に螢
とびくる

たそがれのあかるさも消え肌さむみ心つつし
み俾にゆらる

長雨がやみてみたればしみじみと秋はわれら
に交まじはりあたり

今われは何よりもこの山上の楓の肌にしたし
めるなり

山深み草木しげる草木がわれにせまり來われ
にせまり來

障子あくる音かろらかにすみたれば椽の日ざ
しに心よるかも

こまやかに夕べの冷えが身にそひて初秋の山
にさしぐみにけり

夜がくれば「御晩になりした」と云ふ挨拶をとり
かはしつつ灯をともすなり

山里のかたまりあへる四五軒が道さしはさみ
夜の灯ともせり

なじみつる温泉の村をすてまた知らぬ山めぐ
る里の夕ぐれに入る

東京を遠く南に感じつゝ、白石町をとぼとぼあ
るく

濁

り

川

桐の花雨ふる中を遠く來し常陸の國の停車場
に咲く

あづまぢのみちのはてなる祝町のくるわを雨
にぬれてゆきすぐ

板の間のくらきに晝の遊女ゐしを見つゝ我が
身は行きすぎしなり

雨後の晝を水戸市に入ればひた／＼と水にど
りみてる路傍の小川

棹にほす子供の着物うつりたる雨後の塙末の
うす濁り川

公園の梅林の青葉がくれの青き實のその晝わ
れにしたしみしなり

いましがた我が身のありし丘をよそに汽車は
汽車とて走せすぎにけり

畫

間

20

牡丹園のすだれをもれて一ところ入日ひがあたり牡丹黙だませり

わが瞳華美はでにびしくとらへつゝおし黙だまりある
朧慾な牡丹

本所錦糸堀のたまり水に日暮れ闇はひ風のさむしも

黒い工場とたまり水の間にたそがれの白き道
あり人力走りすゝむ

生きものゝ身うちのかし青葉の五月
の太陽が照る

甲羅虫草の葉するにつるみたり野原の露は晝
ぬるみつゝ

核^{たね}かづき黒土いづるこの芽生へまことにこれ
は力持てるよ

緑葉の陰に嬰^{えい}兒^じの足の指ならべみ山すゝ蘭花
もちにけり

ほのくゝとわがこゝろねのかなしみに咲きつ
づきたる白き野いばら

夕がたの雨あたゝかく野いばらにぬれそゝぐ
なりなつかしいかも

目の前の日なたの地に來て砂あびる思へば雀
も可愛き小鳥

汽車道の赤土土手の白き花夏が身近にまたよ
りて來ぬ

窓ぎはのとある工女の二の腕の今日も今日と
てふとれるすべなさ

はづみある處なとめ女の肌のはねかへす物なくいた
み汗もつ晝間

をんなの春の肌身の汗ばみをむし暑くつゝむ
着物のおもみ

淫^レれ女が着ものしんなり湯上りのからだにつ
くる晝のこゝるね

見らるゝをひたひに感じうつむけるおぼこむ
すめのをんならしさよ

いちらしさ忘れもかねつ泣き居たる浴衣の胸
の乳のふくらみ

肌

身

34

西洋の繪紙にて幼馴染おななじみみなる空いろばなのみ
ちばたに咲く

太陽はあたゝかにあたゝかに母らしき愛を送
れり空そら色いろの花に

我が顔を雨後の地面に近づけてほしいまゝに
はこべを愛す

子供の頃皿に黄を溶き藍をませしかのみどり
色にもゆる芽のあり

年上との女にの愛にに身をつゝみあまゆるおもひ春
の夜に觸る

春の夜のあまきうるほひこそばゆく指尖ゆびさきに來
てくちづけをする

この君のふところぬくきにはひよりわれつゝ
むらむこの母らしさは

足ひろげ男ををざる彼の女こそこよひのむね
をいたがゆくすれ

山王の櫻しらみて夕ぐれのはかまさに我
が身のひたる

茶屋女身をすてばちのあゆみぶりさくらしら
みてひゆる夕方

赤坂の茶屋に三味なり灯がともり山王の櫻は
つめたくしらみぬ

人歸りさくらしらみてくるゝなりわが身ひと
つはいかにすべけむ

芽ぐむ木にめぐられて立つ木は何も云はねど
何か何かそゝらる

高き木の新芽見あぐるわが肌の汗ばみいとし
夏の秋波

我が顔に青き光を受けながら藪かげ草の肌身
をのぞく

足袋ぬげば春の皮膚はだと我が素足すあしもつれあふこ
そわりなかりけれ

つゝましく君は小さき手をあらふ好きなその
手がおとなしく濡る

食卓の牡丹の花に見入りつゝ四月二十日の晝
とあひみる

そゝろなる浮氣娘の襟あしの生へぎはにくむ、

食卓の藤

思ひつめわがかなしみのほそるなり新芽しんがに露
のひゆる夕方

旅
の
雪

50

旅に來てはじめての夜のさびしきに明くれば
降れる山里の雪

朝の雪谷間の石につもれるを温泉のガラス戸
によりそひて見る

納屋の屋根の晝の雪どけ四十雀いくつも前の
木の枝になく

向ふ岸の崖の日なたの南天の赤き實よ實よさ
なむづかりそ

残る雪青白みつゝ浮べるを日くれわびしくう
ちまもるかな

磯町の床屋によりて髭剃れば鏡にうつり霞ふ
るなり

去りがてに蜜柑畑をさまよひぬひくしげれ
る緑したしみ

俾走り黄色の蜜柑後あきになり温泉のの町さかる胸むね
つぼらしさ

糸

く

す

58

や、疲れ膝くづしつゝ、窓による顔の上のほ氣せの
くき女よ

のぼせたる頬の紅くれなるのにくゝして君に奪とらるゝ
我が心かな

腕にからむ紅き縮緬つめたさと重おさおもへば
君のいとしや

心行きて指尖ゆびさきとなりなでゝゐる女のまろくし
ろきたゝむき

工女たち工場こうばの前の空地あきぢにて日の目をみつゝ
遊ぶあはれさ

ブリツヂの赤き絲くづ人ふみてなほのこりゐ
る赤き絲くづ

村だけの心をつくし祭禮まつりする人たちの上に秋
空くもる

うきくくと屋臺の上に神樂せし人等いちらし
雨降りいでぬ

さゝやかなる八兵衛稻荷の祭禮まつりの二日目の今
日も雨が降るなり

菊の中のうす黄の菊と咲き出づるこの草の上
もよそにはおもはず

普請場に材木を置く遠ひゞき病みて臥す日は
悲しかりけり

庭見れば土にしみ入りしみ入りて冷え／＼雨
の降り出でしかな

雨雲のひまより夕陽うすくさし今日も暮れ行
く臥しつゝ居れば

黒き虬白き八つ手の花に居て何かなせるを臥
しつゝ見やる

遅くつきし湯元の宿のくらき灯にわれ等の食
べし黒き羊羹(日光の旅を憶ふ四首)

くらき灯にわれ等居群れて冷えし手を火鉢に
よせし湯元の宿屋

や、胸の悪き氣もちに仰あやむ向きし湖上の舟も今
はなつかし

馬返し蔦屋の椽に暮れてよりやすみし時のひ
もじき氣持

敷き居たる野邊の草寝て起きもあへぬそのす
なほさもみすてかねつゝ

野は夕日百姓たちは黒土に鋤を打ち入れ打ち
入れやます

黒土をほればひそめる百合の根に冬の日ざし
のまつはりに來る

粉

雪

74

明治屋のクリスマス飾り灯ともりてきらびや
かなり粉雪降り出づ

きげんよくあびそてゐしが女の子たふれころ
びぬかたき大地だいちに

冬の日ふゆのひは壁と地面ぢめんの直角直角に來りたまれりそれ
がよろしき

學校に初めてわれの入りし時廊下になしく
自家をおもひき

門口にお鶴人形は膝なで、めぐみもふかき……
……とうたひ居しかな

大わた小わた日の暮れ方のうら寒み綿着て飛
ぶか悲しい虫よ

夕月にみんなの影のうつり居る地をなつかし
み踏みく遊ぶ

遅くなれば月きらくどやさしさのなきも悲
しく自家に歸りき

眼さむれば隣の室のはなし聲そはわが上にか
かはるらしも

目に白く雪の見えつゝ冬くればいよゝしたし
き軒ちかき山

落
葉
樹

84

蕎麥の花しら／＼咲けり山裾の朝日のさゝぬ
斜面の畑に

埼玉のとある小村の停車場の柵さくのダリヤに秋
の陽ひあつし

日光にちかき停車場杉の木の暗くきが前にコス
モス光る

文挾ふはさの停車場ていしやうの前に一本いっぽんのあかるき黄色きやうしきの秋
の木立きだててり

霧きりの粉こな空気くわいきにまじる林間りんかんをつめたき手てしてい
そぐ旅人りょじん

うち向ふ山やまの傾斜けいさのしみぐと目めにしみ入り
てかなしき夕ゆふべ

黒き山へ夜の湖水こえ灯の色の月落ち行けり
心をのゝく

隣室のサノサ節いとものかなし湖水の岸の朝
の旅籠屋

落葉樹葉落つる前の黄色なる森のあかるみわ
れらよこざる

枝はなれ枯葉たゞよひ木のもとの大地だいちにつき
ぬなつかしいかな

姉たちの乗り來し俦この宿の帳塲の前に並べ
るさびしさ

湖うみじりの山あかゝと入目する湖水をわたる
舟の旅びと

子供泣く暮る、湖水を渡り行く舟なる乳母の
ふどころに居て

男體の山のくづれのあらはなる土に夕日のさ
せるあはれさ

男體のうへの青空しろき雲山の秋の日おだや
かに暮る

舟上る湖水の岸のいさゝかの畑の野菜をなつ
かしむかな

瞳吸ふ青き野菜に目をまかせ夕べつめたき湖
ぎはに立つ

白樺のしろき木の肌森を行く夜の旅人のまみ
につれなし

月になる夜の山路のつめきに姉の聲などした
しみてきく

夜道行くわれ等の後あとについて来る子供なつか
し何處に行くや

ちやうちんに昔噺の情調をなつかしみつゝ夜
の旅をする

森の家灯をなつかしみ立ちよれば親子集あはれひて
火をぞ焚たききける

夜道するわれ等いとしも樅もみぢの木きの深林ふかふかを出で
湖うみ添そひを行く

山上やまの上の温泉おんせんの湧わく村むらの十月じゅうがつの夜よの灯あかりにせまる
寒ふき山やまの氣き

山の温泉の古旅籠屋の障子のみしろく目に入る朝のさみしさ

旅籠出で、山にむかへば冬の息山にかゝれり
旅ごゝろ泣く

山の木々沼尻ぬまじりの木々も冬らしくくもれる空の
底なに並み立つ

山の木々黒き黄色きかさなりてわれ一人を見
下すさびしさ

山したひ山に來ぬればふと切に淺草などのし
たはしきかな

榎かやに似しむくつけき木がしほらしき赤き實つ
けて秋の日に立つ

熊笹のうす黄が纏ふ山の上の濃き藍色の空の
するごさ

空の藍山の黄色のくつきりとかかたみにせめぎ
秋晴に立つ

山火事に焼けたる木立白光る山のうへなるは
つ冬の空

白樺の白き木肌に手をふれて眼を見ひらきぬ
秋風をさく

落葉ふむ足をとどめてたゝずめば沈黙しんまひろが
るまた歩み行く

旅人の行く道さきにさゝやきてかなしみをよ
ぶ落葉樹かな

葉も花もすがれ果てたる秋草のなほ立てるあ
り山の道ばた

しばらくは瀧に心を吸はれつゝ秋の日なたに
われ等たゝすむ

うつくしきひだをつくりて流れ行きながれ行
く水に愛をおぼゆる

石楠木が蓄の用意早なりて山ふところの日だ
まりに立つ

落葉松の山をくだりて水ひかる高原に出づや
や頭痛する

砂みちに空氣草履の内輪なる足跡のこるなつ
かしさかな

パラソルに秋の日光る眼の痛さや、疲れつゝ、
高原を行く

大いなる斜面に秋の日を受けて男體山の夕ぐ
れに立つ

男體の樞に紅葉に午後の日の弱まりて行く暮
のしづけさ

日光の宿のおばしま軒ちかく山高まれるなつかしさかな

日光を二時間の後のちわれ等去るおもひさびしみ御おん靈たま廟やを出づ

鹿沼にて姉にわかれし汽車の中のそとろにさびし野の靄を見る

日光は次第に遠み過ぎ去れる旅のかなしさ野
すゑ汽車行く

野原ややなぞへになれり夕月の光たまるを汽
車より見やる

寒き夜にかたまりあひて急ぎたる戦場が原の
思ひ出かなし

埼玉の小停車場に汽車とまる^{たいく}橙いろのまばらなる灯よ

東京に近づく汽車に日は暮れて埼玉あたり野の灯さびしも(大正元年十月)

地^ヂ

面^{メン}

122

天氣よき日曜の朝の勸工場日陰つめたく秋を
感ずる

ネルに着る袷羽織の甲斐絹裏つめたき光澤の
さびし雨の日

わが心森の緑に浸りつゝその言ふことに酔へ
るさみしさ

橋の影うつれる河の洲に咲ける芹の小花の白
のかなしさ

水の音に心撫でられおとなしくあまやかさる
ゝ流のほとり

遠く行く夜汽車の窓の暗き灯のいくつも過ぎ
ぬ踏切に立つ

何處にか子供の遊ぶ聲きこえ樹陰こかげの闇の身じろぎもせぬ

膝折りて濕りしめを持てる土の香をかげば子供の遊びなつかし

をんなの子かごめくゝを聲々に唄ふはかなし
町の夕闇

少年の記憶かなしも遊びすぎて闇のせまりし
ぬりごめのかげ

汽笛吹き羅苧屋の車街まじとほる晝のこころのな
ごむ土曜日

四十雀頬のおしろいのきはやかに時たま來り
庭に遊べる

女の子頬すりしたし鶏頭の毛糸の手鞠咲き出
でにけり

鶏頭の黄いろと赤のびらうごの玉のかはゆき
秋の太陽

羽織着る君が素足すあしの冷たさのかはゆさいたみ
胸にまつはる

そらしたるまなざし追へば追はれつつしばた
たき居るまみのうるほひ

今しかた茶の間の時計十うちぬ厨にあまねき
秋の光線

ダリヤ咲くさけばさきたるさみしさに花の瞳
の涙ぐみたる

疲れたる光の中にコスモスのあらはに咲ける
午後頭痛する

コスモスの花群がりてはつきりと光をはちく
つめたき日ぐれ

青き露灯ともし頃の冷えくどすこやかなる
身の食慾そゝる

菊切れば葉裏にひそむ虫のありうごきもやら
ぬこの哀れさよ

森の鳥わがかなしみに針さして鳴く聲いたし
山をあゆめば

利公の爲めに

140

あすなるの 高き梢を 風わたるわれは 涙の目を
しばたゝく

愛らしき眼を見はりつゝ 息づける 苦しき様を
見るに堪へかぬ

人皆に見捨てられたる 床の上にわがをさな兒
が眼をひらきゐる

人目なき處に妻とかくれつゝ泣きくづれなば
やすからましを

夏の中なつにひそめる秋を感じつゝ涙ぞいづる子
の死のちにし後

程もなく秋くることのわびしさと面おもてやつれせ
し妻しのび泣く

子を失ふ親の悲みそは遠きこと、思ひしを今日われに來し

待ち居たる九月の末は未だ來ず早くわが子は死にて世になし

脇差のすこしぬきたる刃の上に蓮華ぞうつる
凶事ありし室

おとなしき死しに顔かほを見れば可愛さに口きかずと
も傍そばに置きたや

顔のうぶ毛腕のうぶ毛の可愛さよいく日の後のち
も眼に残るべく

やはらかくをさなきものゝおごそかに眼まなこつぶりて我より遠し

うけ口のくちびるの色變れるに水をそゝぎて
見つめ見つむる

汝が母は看護みとりもせず
に別れたり母も子供もか
なしかるらむ

人々を力なき目に見まはせし
汝がいぢらしさ
忘れかねつも

汽車の笛遠くひびきて夜はふけぬ我が子の傍
に通夜して居れば

いとし子のつめたきからだ抱きあげ棺にうつ
すと頬すりをする

友禪のをんなのごとき小袖着て嬰兒えいじは瓶の底
にしづみぬ

父母の涙ぬぐひしハンケチを顔にあてやりひつぎ
にをさむ

小さな笠よ草履よはた杖よ汝が旅姿ゑがく
にたへず

人形を相手となしてな泣きそ雨そぼふりて寂
しき夜も

安らかにあれかし今はわが力及ばねばたゞそ
れのみをこそ

木の繁る上野の奥の土しめる谷中の墓地にわ
が子葬る

墓地の杉蟬はなけどもいとし子は姿も見えず
土に入りつゝ

寺の門敷石の上にさくら木の黄なる葉散れり
晩夏の日照

子の生れ子の死に行きし夏すぎて世は秋となり
り物の音すむ

遠方に鍛冶屋かねうつ音すみて秋やうごく
八月のする

曼珠沙華か黒き土に頭あぐ雨やみ空のすめる
夕べに

墓ならば谷中の墓地に利公も小さき墓標を立
ててねむれり

若き母頭痛むに手を當てゝむかふわが子の墓
標の白さ

線香の煙墓標をめぐれるを二人ふりむき去りがてにする (大正元年八月—九月)

夏

164

初夏の眞晝の野邊の青草にそのかげおとし立
てる櫨の木

踏切をよぎれば汽車の遠ひびきレールにきこ
ゆ夏のさみしさ

菊に似し白き小花をおほくつけ夏草しげる汽
車みちの堤

駒込の停車場に來ればあはれにも萩のほへ
る七月の末

汽車とまり汽車の出で行く停車場のダリヤの
花の晝のくたびれ

草堤の茅が根もとに野いばらの白く泣き居る
夏の停車場

夏草のほひの中にたゞすみて物思ひ居れば
日のかげろへる

夏草のしげみがなかにうつむける釣鐘草のよ
そくしさを

白き指に紅のにじみてなまめけるにほやかさ
もて咲く葵かな

いらんどの手植ぎよくらん東京の上野の夏を
さびしらに咲く

何の木に咲ける花にや水無月の夕ぐれ君の門
にほへる

うちしめり街まちのざよめききこえ來る山の手町
はかなし夏の夜

茶屋女うちは持つ手の汗ばみの晝のけだるさ
きりぐすなく

恐ろしき黒雲を背に黄に光る向日葵ひまわりの花見れ
ばなつかし

くろみもつ葉するに紅き花つくる茨竹桃の夏
のあはれよ

からみあふ花びらほごくたまゆらにほのかに
揺るゝ月見草かな

指
の
傷

178

わがこゝろかきみだされて胸つまる君が小指
の白き繙帯

より添へばヨードホルムのうす甘きにはひ皮^は
膚^だに惱ましく沁む

可愛さのわれなやましむ君がせる指の繙帯白
くかなしく

風觸れず指^{ゆび}尖^{さき}熱^{あつ}き繃帶を君苦にしつゝ寝ねが
てにする

なやましき夜の寝ざめに肉體を切に感ずる指
の傷かな

指^{ゆび}尖^{さき}に身うちの熱のあつまりてうみ持つ傷の
痛むあけ方

縹帶の白きもすこしよごれつゝ憎さもおぼゆ
可愛さのはて

君泣けばかの縹帶のよごれめのいよゝ我を
吸ひやまぬかな

強き日にさすバラソルの日^か蔭の柄を握れる指
の白き縹帶

指^{ゆび}尖^{さき}の傷^{きず}の痛^{いた}みにひ^ひけつ、市^し街^がの電^{でん}車^{しや}のき
しるわびしさ

夕
方
に

188

夕方に子供の遊ぶころとなり町にも下る青き
うす靄

すかさされて泣く目をやりし夕空に遠くやさし
き月照り居たり

夏來れば築地の朝の好もしさ海の風吹く凌霄
花

バラソルに通リ雲より雨落ち來かん甲走はしりたる聲
を立てつゝ

むし暑く寝ぐるしき夜も青白うやゝ冷えそめ
て鳩なく聲す

大風の吹き過ぎ行きし遠き音きゝつゝ居れば
夜のおそろしさ

風邪の後始めて入れる湯上りのつかれに抱かれ物音をきく

寝て見れば寝起のわるさ梅雨時のじめくさとするもの惱ましき

梅雨時の執念き濕りしづみ居る厨の隅の生姜のほひ

藥

198

鳩起きて軒のとやより挨拶す花壇の芥子は朝
風に揺る

薔薇色に雲のにはへば朝の唄鳩のうたひて花
壇おとなふ

真中の小さき黄色のさかづきに甘き香もれる
水仙の花

花びらの真紅の光澤に強き日を照り返し居る
雛芥子の花

愛らしき金のさかづきさし上げて日のひかり
くむ花菱草よ

しほらしき野薔薇の花を雨は打つたゝかれて
散るほの白き花

ゆづり葉の新芽^{しんが}かはゆしやはらかき緑もたぐ
る桃いろの莖

象の肌のけうとさおもふ椿の木枝さき重き花
のかたまり

黒もじのうす黄の花にやはらかき雨ふりそゝ
ぎ春の暮れ行く

愛に酔ふ雌蕊めしべ雄蕊おしべを取りかこむうばらの花を
つつむ晝の日

花びらをひろげ疲れしおとろへに牡丹重たく
萼くさねをはなるゝ

芍薬しやくやくの黄いろの花粉目にたゞれ香をかぐ人に
媚薬こびやく吐く

桐の花露のおりくる黎明しひめいにうす紫むらさきのしとやか
さかな

桃の實の肌のやうなるうぶ毛して少年の頬の
うひくしさをよ

金魚草にトンボとまりて金きんの眼を日にまはす
時ドンのとゞろく

眞晝野に晝顔咲けりまじぐと待つものもな
き晝顔の花

あつき日を幾日も吸ひてつゆ甘く葡萄の熟す
深き夏かな

結べども桃いろにならぬ愁^{うれひ}かなくれなるの紐
白妙の紐

紅薔薇見し眼を移す白百合のそのうす青さ君
が頬に見る

如^{きさ}月^{らぎ}や電車に遠き山の手のからたち垣に三十
三才鳴く

宿^{しゆく}の山蜜柑ならびて黄なる實の朝日受け取る
枝葉^{えだは}の中に

菜の花の黄色小雨にとけあひてほののにじめ
る晝のあかるみ

二階より君とならびて肩ふれて見^み下^{おろ}す庭のヒ
ヤシンスかな

舞ひ終へて扇を前に會釋する舞妓が肩の息な
つかしむ

灰いろに埃ほこりかゝれるかなめ垣うるほふ雨に矢
來を通る

汽船かふねに居て湊の町のわか葉見る陸にも海にも
晝の日光る

海荒るゝ前の沈黙しんもく雲おもく島山しまよもぎにほひ
ながるゝ

水引の根をあらひ行く野の水の淀みにうつる
秋の夕映はえ

あ

か

り

222

母は子に思ひ絶えよとさとしけりその夜の月
は二人てらしぬ

戀ゆるに人をあやめしたをや女の墓ある寺の
紅梅の花

をんな坂袖もつれあふ舞姫がかすみに濡るゝ
朝詣かな

顔と顔よせて行燈の繪を見るや櫻にほふう
すあかり哉

物かげに怖ぢし目高のにげさまにさゝ濁りす
る春の水哉

風絶えてくもる眞晝をものうげに虻なく畑の
そら豆の花

空もやう氣にしてもあによめざるあによめに門の桃散る雨ふ
くむ風

蓴菜ねなば生ふる池をめぐりて奥庭のほくら祠見に行く晝
の雨かな

水ぐるま近きひゞきに少しゆれ少しゆれるる
小手鞠の花

うす曇遠がみなりをきく野邊の小草がなかの
晝顔の花

川風に堤の野菊花ゆれてさむき朝なり鴉はまどり鳥の
なく(明治四十一年十月利根川に遊ぶ四首)

網に入る鮭のうろこにうそ寒う夕日ひかりぬ
船の秋風

月さむき夜頃となりぬ
蘆の穂のしろき堤のこ
ほろぎの聲

一村^{ひとむら}の夢おだやかに
月ふけて小草の露に虫の
音ぞすむ

家ごとに引窓つけてあかりとる竹の山崎簾の
うへの月

うしろつきもしやと思ひおもふ間に傘遠ざか
るたそがれの雪

八

つ

口

あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと
あしきふりまよふこと悪むことと

236

うす雪は小雨にとけてうぐひすのさゝなきを
さく簾かげの道

春の雪をんなの人の八つ口の傘をこぼれて匂
ふみちわる

いもうこの小さき歩みいそがせて千代紙かひ
に行く月夜かな

おくれては母のあと追ふをさな兒のおさげの
髪に春の風吹く

二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり
菜の花のみち

田舎町の料理屋の庭に桃が咲きならべてほせ
る番傘ひかる

大原や野菊花咲くみちのべに京へ行く子か、母
と憩へる

野菊一むら水をおほへるいさら川さゝやき細
い野は暮れにけり

落葉やく青き煙のよごみたる林をゆけば雨の
おちくる。

時雨降り早仕舞せる宵町のくわり障子のとも
し灯の色

246

集のすゑに

こゝに集めたのは、明治三十四年自分が十六歳の頃から、大正二年二十八歳迄の歌である。しかし前の歌は少く近年の歌が多い。

並べ方は新しいのを先にした。今の自分に近いものから順にした迄である。

この集を公けにするに當つて、自分が未だ十三歳位の少年の頃から、ねんごろな教を賜つた佐々木信綱先生と、常に直接聞

接に自分を激勵してくれた白樺同人諸兄に、心より感謝の意を捧げる。

又、有島生馬三浦直介二兄の一方ならぬ好意によつて、此集が好ましい體裁に出来たのを、自分は難有く思つて居る。

自分の初子の利公は、一昨年の八月六日の朝生れ、五日間生きて居て、十日の夕方に死んだ。彼は月足らずであつたから、胎内で外界の生活に堪へるだけの準備が出来て居なかつた。

こんな今生の縁の薄いものではあつたが、自分は産婦に知らせられない間は一人で、知らせてからは二人で顔をしめかて泣いた。子供を失ふ悲をひしぐさ知つた。

集中「利公の爲に」云ふ一章は當時の作である。この集を彼に贈つたのも、利公を記念する爲の親心に他ならぬ。

大正三年三月三日

利 玄

大正三年五月廿三日印刷
大正三年五月廿六日發行

銀 奧付 不許複製
定價 金 壹 圓



著 者	木 下 利 玄
發 行 者	河 本 龜 之 助
印 刷 者	河 本 俊 三
印 刷 所	洛 陽 堂 印 刷 所

發行所

東京市麹町區平河町五丁目卅六
振替口座東京二〇九一四番

洛 陽 堂

電話番町四二五八番



